

## 悲しい伝説「うねめ物語」



むかし、あさかの里、山の井というところに、小糠次郎<sup>こぬかじろう</sup>とお春という夫婦がすんでいました。二人はたいへんなかがよく、野良仕事<sup>のらしごと</sup>にも次郎は、お春の絵姿<sup>えすがた</sup>を木の枝にかけておくほどでした。

そんなある日、次郎はいつものように野良に出てはたらいっていると、とつぜん強い風が吹き、枝にかけたお春の絵姿が空高くまいあがってしまいました。ちょうどその時、奈良の都からあさかの里にきた葛城王の一行の前に、その絵姿が落ちてきました。葛城王はその絵姿を見て、あまりの美しさのため、ぜひ会ってみたいと思いました。葛城王は、お春を宴席<sup>えんせき</sup>の接待<sup>せったい</sup>に呼ぶように命令しました。なにしろ葛城王の考え一つで、村が納める年貢<sup>おさねんぐ</sup>も多くも少なくもなるというえらい人です。お春はいわれるままにその席に出ました。その時、

「安積山影<sup>あさかやまかげ</sup>さえ見ゆる山の井<sup>やまのい</sup>の浅き心<sup>あさ</sup>をわが思わなくに」

という和歌をよんで、王をもてなしました。王はたいへん喜びました。

そして奈良の都に帰るとき、むりむりお春をつれていきました。都へ行ったお春は、采女<sup>うねめ</sup>となり、はなやかなくらしをしていましたが、次郎のことは片時もわすれることはできず、中秋の名月の夜、館<sup>ちゅうしゅう</sup>をぬけだし、猿沢の池<sup>めいげつ</sup>に身を投げて死んだように見せかけ、あさかの里をめぐり走り続けました。

やっとあさかの里にたどりつきわが家に帰ってみると、夫の次郎はお春を失った悲しみから、すでにこの世にはいませんでした。お春は、あまりの悲しさに、山の井の清水に身を投げて死んでしまいました。里の人たちは、かわいそうに思い小さな塚<sup>つか</sup>を建てて、采女塚<sup>うねめつか</sup>と名づけました。

この悲しい伝説<sup>えん</sup>が縁<sup>な</sup>で、奈良市と郡山市は姉妹都市<sup>しまいと</sup>になりました。そして、昭和40年には、夏の祭りとして「うねめまつり」が始まりました。



① うねめが身を投げたと伝えられる山の井の清水（片平町山の井公園）